

ているだろうか？」

確かに、今現在ナオヤにオレ以外の相手はいない。環境故の事ではなくオレがいるからだって、そう思いあがつてもいいんだろうか。

「だってさ、オレわかんないよ。ナオヤはいつたいオレのどこがそんなにいいんだ？ 顔？ 性格？ それとも……やっぱり……」

ナオヤの役に立つ魔王だから？

その質問は口に出せなかつたけど、ナオヤはきつとオレのそんな気持ちなんてお見通しなんだろう。オレがもつといるんなやり方を知つてたり、ナオヤにリードされるだけじゃないくらいそういう事も上手かつたりしたら不安にもならないのだろうか。

「顔かただけではないと言つておこう。お前のなにもかもを知っている俺が全てを認めているというのに、何をそんなに不安がつているんだ」

子供をあやすみたいに……実際オレが小さい時にしていたのと同じように腕を回したままぼんぼんと何度も肩を叩く。優しい手つきはセックスする時とは全然違って、どうしてこの人がオレを欲しがるのかまた解らなくなる。

不安……ゆつくりと気持ちを整理して、自分がナオヤに本当に好かれているのか不安なのだと理解した。でももし

かしたらそれすらナオヤに誘導された気持ちなのかもしれない。

「じゃあさ、例えばナオヤはオレが今みたいな姿じゃなくつても好きになった？」

「当然だ……と言つてやりたいが実際は解らん。お前の外見も内面も俺の好みだが……だが確かに、むさくるしい髭面だつたり紫色のスーツを着て歩くような悪趣味な奴だつたら、徒弟として可愛がりはしても抱こうとは思わなかつただろうな」

「それ、チャラ男が嫌いつて言つてるだけじゃないか。……今のオレは好みなんだな？ じゃあもしもう何年か経つて、凄く髭が濃くなつたりナオヤより背が高くてごつくなつたらもう一緒に寝たりしたくなくなるのか？」

返事の代わりにうなじに唇が落とされた。

「妬くのも不安がるのも度が過ぎると可愛くないぞ」

「ごめん、ちよつとしつこかつたよな」

「ククク……背は今更俺を追い越すのは無理だろう」

「まだ解らないぞ。身長は二十代まで伸びる人もいるつていうし」

最近は身長も伸びてないみたいだけど、まだ平均ギリギリだからもう少し伸びてほしいと思つてる。ナオヤがかなり高い方だから、徒弟のオレにだつて素質はあるはずだ。

魔力のせい、オレの心のせい、それともナオヤが側にいるからか、腹の奥のざわめきは激しさを増していく。ナオヤの役に立つ、人間を守るこの力ごとオレを認めてくれるこの人の存在は、もうオレにとつてなくてはならないものになっていった。

あの時ナオヤの手を取った。間違いだなんて決して思わないけれど、こんな関係になってみれば不自然なところはたくさん目についた。

昔から大好きだった大きな手に絡め捕られてなにもかもナオヤの思うとおりにされているような気がする。

厄介なのは、オレ自身がそれでもいいかと思いはじめている事だ。

「ナオヤ、寒いな」

やっぱりもう少し触っていたい。はつきりと言うなら、したい。

最初に触るなど言ってしまった手前自分からは誘えない。寒いという理由をつけて寝具の中でナオヤに向き直り、指先と脚を絡めてくつついた。

「こたつが欲しいな。リビングとここと会議室に一つずつ置こうよ」

「魔王がこたつを玉座にぬくぬくしていたら緊張感がなくなるだろう。リビングだけで我慢しろ」

「ここには？」

「ベッドがあるのに必要か？ 寝るには狭いからそうなたら俺は要らないな」

「それはやだ。じゃあ我慢する」

寒いふりをして目一杯甘えてみる。熱いぐらいの体を持ってあまして擦り寄せると、ナオヤがオレのつむじに唇を寄せながら呆れたように言った。

「腹の具合が悪いくせに無理をするな。今日は抱かんぞ、危なっかしい」

「無理なんかしてないよ」

熱くて、ぼうつとして、離れたくない。

無理はしてないけどちよつと怖いかな。

オレの体はいつたいていどうなってしまうんだろう。内臓が全部悪魔のものと入れ替わっても、今までと同じ食べ物で平気なんだろうか。変な物食べたり人間の精気を吸ったりしなくてもちゃんと維持出来ないと困るな。角や牙が生えて鬼みたいな顔になったり、ナオヤの嫌いな姿に変化しないといいんだけど。

たくさんの不安を押しとどめるように目を閉じて、毎晩抱きしめてくれるその手のかたちを思い描きながら眠った。